

つたのは通信

特定非営利活動法人 としま遺跡調査会

遺跡・遺物からみた「江戸時代の雑司が谷の暮らし」

地下鉄副都心線雑司が谷駅構内の遺跡解説板が新しくなりました



新しくなった遺跡解説板

雑司が谷遺跡は、旧石器時代から昭和時代までの遺構・遺物が発見されている複合遺跡です。特に鬼子母神周辺では、江戸時代の茶屋や料理屋など参拝客をターゲットとした店の遺構や遺物が多く発見されています。これらの茶屋や料理屋は、江戸時代の絵図などにも描かれており、当時の賑わいを知ることができます。一方、江戸時代の雑司が

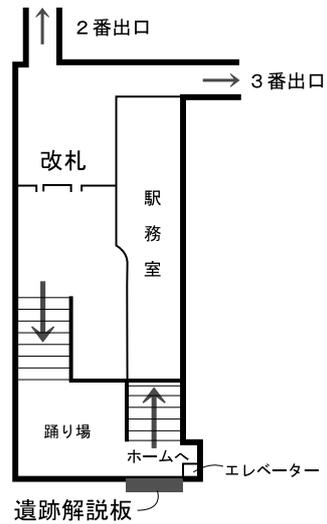
谷には寺社の参拝客や、これら参拝客を持って成人たち以外にも、この場所で暮らしを営む人たちがいました。

今回の遺跡解説板では、江戸時代の雑司が谷で生活する庶民の暮らしを、遺跡の発掘調査で発見された遺構や遺物、江戸時代に描かれた絵図などから解説を行っています。 (榎本邦人)



前年度の遺跡解説板を外し、きれいに掃除をします。毎月掃除をしますが、ススやホコリが目立ちます。

駅ホームに続く階段の踊り場は、電車が来るたびに強風が吹きます。二人掛かりで力を合わせ解説板を設置します。



遺跡解説板のは、東京メトロ副都心線雑司が谷駅構内、改札（目白通り側）を入った階段の踊り場に設置されています。お近くにお越しの際は、ぜひお立ち寄りください。

としま未来文化財団
文化カレッジ

「戦国の城を歩こう」

昨年の11月から今年の2月の3か月間に計4回にわたって、豊島区勤労福祉会館より委託を受け、中世の城跡を巡る講座を開催しました。講師は、中世研究者である当会理事の橋口が担当しました。秋から冬にかけての寒い時期に外を歩く講座でしたが、各回とも出席率は高く受講者20人中の8割から9割の方にご参加いただきました。

初回の座学で中世城館研究の概論を学んだ後、第2回以降に遺跡に赴き、実際に城の構造を観察することで、中世の城の構造がどのように変化したのか体感することができました。

最初の城は、埼玉県長瀨町に所在する仲山城です。この城は、後背に別の山、前方に荒川の急な崖が控え、標高267mの小高い山の頂上に位置しています。築城は14世紀初期と言われ、城がつくられた山は、南北に延びる尾根を有する細長い形状をしており、東西は急な崖に挟まれています。その南北の尾根に東西方向の堀を入れることでいくつかの曲輪がつくられているのです。戦国期より前につくられた単純な構造の典型的な山城です。ここは、比較的低い山で、参加者の方々も難なく登ることができ、余裕をもって聴講することができた様子でした。



日本最大の板碑「野上下郷板石塔婆」前で記念撮影 仲山城の麓近くに現在所在しています。この板碑は仲山城2代目城主、長子直家の供養のため建てられたと言われています。

次は、八王子城です。その名にある通り、東京都八王子市に位置しています。16世紀後半につくられた戦国期の城です。頂上の標高は445mを測ります。頂上付近に位置する本曲輪などの大きめの曲輪を中心に、頂上から延びる尾根が、段状に成形され、数多くの細かな曲輪がつくられています。仲山城とは違い、非常に複雑な構造になっています。麓付近には、御主殿と呼ばれる、城主が生活していた建物が建てられていました。御主



八王子城大堀切 急な角度の堀切は、現在も当時の様子を残しています。

殿付近は現在、復原整備されています。昨年には、この御主殿近くから池跡が発掘されました。この池は、枯山水ではなく、水を湛えたものであったことが、調査により明らかにされました。それまで、当時の関東武士の邸宅の庭園は枯山水と考えられてきましたが、この定説を覆す大きな発見となりました。

最後は、埼玉県寄居町に位置する鉢形城です。この城は、荒川と深沢川の崖に挟まれた土地に位置しています。標高差はさほどありませんが、南北に1 km 近く広がる広大な面積を有するのが特徴的な城です。築城は15世紀の後半ですが、16世紀後半に戦が本格的になると、曲輪の一つ当た

りの面積が巨大化しました。高低差はあまりないため、道程は困難ではありませんが、ただただその広さに圧倒されました。

今回は、戦国期とそれ以前の計3つの城を巡り、戦が活発になるにつれて中世の城の構造が複雑化してゆく様相を学ぶことができました。各城の行程は容易なものではありませんでしたが、単に机上だけで学習するのではなく、実際に足を運ぶことで、より中世の城についての認識を深めていただけたものと思います。最後にとったアンケートでは、また是非受講したいとの声を数多くいただくことができました。勤労福祉会館では開催できないことになりましたが、参加希望の多い講座です。2014年度もどうか別の形で開催したいと考えております。

(山崎吉弘)



鉢形城から荒川(右)の崖を望む
川は防御の役割を果たします。

“社会貢献活動見本市”に参加しました

去る2月22日(土)に豊島区勤労福祉会館で開催された「社会貢献活動見本市」に当会も出展しました。このイベントは、主に区内で活動するNPO法人やボランティア団体のほかにCSR(企業の社会的責任)活動を行なっている民間会社などが参加する催しです。今回は40を超える数の団体が参加しました。一般の方や社会貢献活動を行っている他団体にアピールし、ジャンルの垣根を越えた交流ができる機会となっています。

当会の展示では、活動アピールだけでなく、区内の遺跡とこれまでの発掘調査の成果の紹介といった埋蔵文化財の普及に重点を置いたテーマとなっています。展示ブースに来られた方にお話しをすると、まず、最初に「豊島区に遺跡があるんだ」といった反応を一様に返されます。遺跡調査会も

NPO法人になってから、講座や展示など様々なアプローチで遺跡の紹介を行なってきましたが、まだまだ至らないことを痛感し、さらなる普及活動の必要性を感じました。

(山崎吉弘)



展示ブースの様子

発掘調査報告書 新刊のお知らせ

『^{そめい 30}染井XXX』(染井遺跡クラシックガーデン地区／としま遺跡調査会刊行)



発掘した場所は、染井植木屋の一人である、伊藤紋三郎家（あるいは治郎衛門）の屋敷地に当たります。調査の結果、発見された遺構の傾向から、表通りである染井通り側に「植栽空間」、その裏手の敷地中間で「花壇や地下室が混在する空間」、さらに奥側には「建物跡と地下室の空間」と、大きく3つのエリアに大別できるものと想定できました。植木屋活動の証左でもある植木鉢^{こて}関連遺物は、当該調査の総出土遺物量の約4割を占めます。その他、鋺と推定される金属製品を本書では提示していますが、植木屋研究において植木鉢以外の道具も無視できません。(高木翼郎)

『^{すがもまち 17}巣鴨町XVII』(巣鴨遺跡パルコートいせや地区／豊島区教育委員会刊行)

中山道沿いに面したパルコートいせや地区は、江戸時代には巣鴨町の上組に属しており、発掘調査では、植栽痕や地下室などの遺構が発見されました。また、明治時代以降の建物基礎も見つかっています。遺物は江戸時代から近代にかけての陶磁器・土器・金属製品等が出土しました。江戸時代の陶磁器や土器には碗や皿などの日常生活で用いるものが多く見られること、こうした陶磁器・土器の大半が植栽痕から出土することをあわせて考えると、江戸時代のこの地区は町屋の裏手に位置する庭のような空間であり、また生活の中で発生したごみを廃棄する場所としても使われたようです。明治時代以降の建物基礎は、旧中山道を基準として向きが決められていたことが明確にわかります。江戸時代の遺構にはこの規則性が見られないため、江戸から明治へと時代が移るなかで、本地区の土地利用のあり方も変化していったと考えられます。江戸時代の「巣鴨町」がどのような過程をへて、現在の「巣鴨地蔵通り」へと変貌していくか、その一端を示す興味深い資料と言えるでしょう。(渡辺慎也)



『^{すがもまち 18}巣鴨町XVIII』(豊島区地域別調査報告 巣鴨遺跡における発掘調査／豊島区教育委員会刊行)



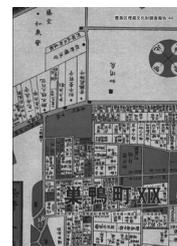
本報告書では、巣鴨遺跡の6地区を掲載しています。これら江戸時代の6地区は、巣鴨町と巣鴨村に位置しており、当時の遺構・遺物が多く発見されています。各地区とも敷地内を区切ると考えられる溝状の遺構や生垣が発見されています。江戸時代以外の成果としては、巣鴨3-14-21地区では縄文時代後期の大洞式土器や平安時代の須恵器が出土しています。また近代の建物跡の検出なども発見されています。それぞれの地区の調査面積は狭いですが、6地区を合わせることで、巣鴨町や村の土地利用の一部が、明らかになりました。(榎本邦人)

『^{すがもまち 19}巣鴨町XIX』(巣鴨第一保育園分園舎地区／豊島区教育委員会刊行)

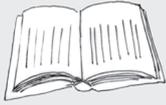
『巣鴨町XIX』の報告地点は、巣鴨地蔵通りから奥に入った住宅に囲まれた場所で、豊島わんぱく土俵広場の跡地で発掘調査がなされました。地蔵通り、すなわち中山道の南側は、江戸時代の町地「巣鴨町」の一角に比定されています。

本地区における土地利用は巣鴨町で主にみられる遺物群よりやや古い、17世紀末からの状況が確認できました。巣鴨遺跡の中でも比較的早い巣鴨町成立以前の、生活の場を捉えられたことは、町地成立の背景を探る貴重な成果です。その後の18世紀末葉以降には、本地区周辺が植木屋であった状況を捉え、本地区の北東方向のオモテ空間で金属加工活動が行われていた可能性を見出すことができました。植木屋は、造り菊を得意としていた斉田紋太郎家に比定されます。また、金属加工に関しては、銅製品の生産(= casting・修復)が考えられ、史料にみえる「鑑屋 金兵衛」で発生した産業廃棄物の一部とみられます。金属加工、殊に銅製品生産の痕跡を見出したことは、巣鴨町における銅製品鑄造の存在及び様々な金属加工のあり方の解明に資するものであると言えます。

さらに江戸時代だけではなく、わずかながらも鎌倉時代頃の中国の南宋で焼かれた白磁の破片も発見され、隣接する染井遺跡で発見された鎌倉古道との関連が注目されます。(高木翼郎)



※報告書の一部は頒布できるものがあります。頒布方法につきましては、「豊島区埋蔵文化財調査報告」分は豊島区行政情報係、もしくは文化財係へ、それ以外は当会までお問い合わせください。



～図書を寄贈していただきました～

昨年度（2012年10月～2013年9月）に多くの機関や団体、個人の方から図書をご寄贈いただきました。以下に記して感謝申し上げます。

江戸遺跡研究会、愛媛県歴史文化博物館、鹿児島大学総合研究博物館、金沢大学人文学類考古学研究室、鎌倉市教育委員会、桑畑八郎、甲府市教育委員会、湖西市教育委員会、さいたま市遺跡調査会、白岡市教育委員会、新西郊文化研究会、杉並区教育委員会、第13回中山道すがもまつり実行委員会、テイケイトレード、東京都江戸東京博物館、豊島区教育委員会、豊島区立郷土資料館、豊田市教育委員会、成田涼子、日本貿易陶磁研究会、橋口定志、八戸市教育委員会、弘前大学人文学部附属亀ヶ岡文化研究センター、見附市教育委員会、宮川和也、村上市教育委員会、明治大学博物館、横瀬町教育委員会、横山恵美（五十音順、敬称略）

としま未来文化財団
千早地域文化創造館

展示と講座が開催されます

地域に密着した展示で、多くの方々にご好評をいただいている「まちかど遺跡ミュージアム」が、（公財）としま未来財団千早地域文化創造館においても開催することが決定しました！

また千早地域文化創造館主催の「旧長崎町なるほどゼミナール・II」では、第4回と5回目の講座を当会理事の橋口と、調査員の山崎が担当致します。

千早まちかど遺跡ミュージアム

「豊島区の発掘調査25年」

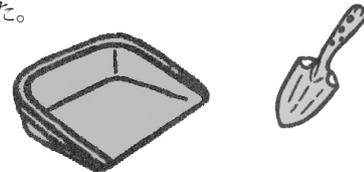
豊島区で遺跡の本格的な発掘調査が行なわれるようになって25年が経ち、これまでに200件超の地点において実施してきました。住宅やビルが密集する豊島区ですが、調査の結果さまざまな発見がありました。展示では、区内の主要遺跡のほか長崎一丁目周辺遺跡を中心に豊島区西部に位置する遺跡での調査成果を遺物や写真パネルでご紹介します。

【会 期】 5月31日（土）～7月31日（木）（6月15日は休館）

【開館時間】 8：30～21：30 ※8月3日（日）まで延長になりました。

【場 所】 千早地域文化創造館2階展示スペース

※ 無料で観覧いただけます。



千早地域文化創造館主催

「旧長崎町なるほどゼミナール・II」（全5回）

旧長崎町（村）の歴史と文化を学ぶ講座です。3回までは、他分野の研究者による伝承や文人会についての講義となっています。4回に当会理事の橋口が座学で長崎地域を中心とした豊島区西部の遺跡についてお話しし、5回には調査員の山崎がご案内し、実際に遺跡を巡り歩きます。

【講座日】 第1回5/24、第2回5/31、第3回6/7、第4回6/14、第5回6/21

【時 間】 午後2時～4時（2時間）

【会 場】 千早地域文化創造館

【定 員】 24名

【費 用】 2,800円（今回は当会からの補助金はありません）

【申込方法】 千早地域文化創造館へ往復はがき送付か持参。詳細は「広報としま」3月11日号、「財団ニュースみらい」4月号に掲載されています。

【問合せ先】 千早地域文化創造館03-3974-1335 ※講座は終了しました。



北大塚遺跡と巣鴨村

北大塚遺跡は、北大塚一丁目に所在することから名づけられた遺跡です。しかし江戸時代以前は、この地域は巣鴨村の範囲でした。巣鴨村の中に、天和から宝永の頃に常陸国府中藩松平家が抱屋敷を取得しており、その範囲が埋蔵文化財包蔵地として指定されているのです。

文献によれば、松平家屋敷地は、享保6(1721)年に抱屋敷のうち約4分の1が拝領下屋敷となりました。その後宝暦6(1756)年に、下屋敷の一部を大久保山城守の深川の屋敷地と引換えました。

享和元年(1801)の村絵図(東京都公文書館)を見ると、大きな方形の区画の「松平播磨守抱屋敷」があり、北側(図の右)の一部が長方形に切り取られています。その小さな長方形がさらに3つに分割され、左側は「下ヤシキ」(松平家の拝領屋敷)、真ん中に「大久保山城守下屋敷」、右端の道路との間に「抱屋敷」とあります。この小さな抱屋敷は、大久保家が北側の道路に近い側に下屋敷を得たので、屋敷と道路をつなぐ部分を抱地として松平家から取得したものでしょう。

さて、この屋敷地の南側には谷端川が流れており、屋敷地は標高26mほどの台地上から谷端川に下る斜面にかけて立地しています。この場所に抱地を取得した松平家は、川越しに護国寺方面を望む傾斜地の眺望を気に入ったのかもしれません。

ところで屋敷地の周辺を絵図で見ると、川沿いに田、その後背に畑、多くの百姓家やそのすぐ近くに寺社が密集する様子が描かれています。巣鴨といえば中山道沿いの巣鴨「町」が良く知られており、遺跡調査でも大きな成果を挙げていますが、実はこの川沿いの地域が巣鴨町の成立を後押しした巣鴨村の中心部であり、村の発祥にも関わる重要な場所であると考えられます。

現在は大塚駅前の繁華街となり、地名は北大塚や南大塚となっていますが、歴史的には巣鴨村の重要な場所であったはずですが、埋蔵文化財の包蔵地に指定されていないため、発掘して確かめることが困難な地域ですが、中世に遡る可能性がある巣鴨村の歴史が地下に眠っているに違いありません。(成田涼子)



『豊島郡巣鴨村絵図』享和元(1801)年

終了しました。

ただいま展示開催中！

前号でお知らせしました、巣鴨まちかど遺跡ミュージアム「豊島区の発掘調査25年」が巣鴨地域文化創造館(中山道待夢)で開催中です。



特設コーナー「お地蔵さまは見た—三百年前の真性寺門前—」展示中です。お近くにお越しの際には、ぜひお立ち寄りください。

【編集後記】

☺暖かい日が続く、遺跡巡りにはもってこいの季節です。当会では、遺跡見学会や遺跡をあぐるなどのイベントを企画しております。開催が決定次第、会員の皆様にご案内いたします。☺

編集・発行



特定非営利活動法人
としま遺跡調査会

〒170-0002 東京都豊島区巣鴨3-8-9 巣鴨複合施設201号室

Tel・Fax 03-3915-6962

E-mail tics389@a.toshima.ne.jp

ホームページアドレス: <http://www.toshima-iseki.org/>

「つたのは通信」の由来: 蔦は大きな樹ではありませんが、生命力が非常に強い植物です。この蔦の葉が周囲の樹木や建物につたい茂るように、多くの人に遺跡の楽しさ、大切さを知ってもらいたいとの願いを込めて会報の名としました。また、染井遺跡を代表する大名屋敷である津藩藤堂家の家紋としても、馴染み深い植物です。

題字: 湯澤和子 ロゴデザイン: 石原幸
イラスト: 菅沼晶子・高木翼郎・千葉弘美